

### 三 機織り淵はたお ぶち

三ノ巻には先に見た若者と夢の話に続いて、次のような話が記載されている。

右(二章で見た話)の珍事について思い出したのは、当所にある機織り淵のことである。先祖の直常の代の初め、嘉慶年中(一三八七〜八九)のことだというが、当所の小川端に三〇間(約五四メートル)周り以上もある大岩があり、その上の平らなところが畳四畳敷きほどの広さがあった。この岩の上に、年の頃一七、八才と見える、美麗なること無双の美女が、白いすげの笠をかぶり、七日の間機を織っていたのを、日向の舟本右衛門が見出した。彼が皆に教えて多くの人で見物していると、美女が機織りした布をしまったところ、側の流れの滝の水から白い水煙が上がリ、その水煙は段々黒雲となり、一時のうちに虚空へ巻き上げ、全てを消してしまったとの言い伝えがある。

そこで今でもその岩を機織り岩と呼んでいる。その後は段々呼び違えて機織り淵という。その女は山優婆やまうばで、その後は遠州の秋葉山にも住み、ここでも機を織って、その布

を晒した淵を機織が井ということである。この記事は直常記には書いてないが、福島ふくしまの珍事を聞いてついでに記すものである。

ここでは機織りをしたのが無双の美女で、しかも七日間機を織ったということが注目される。織女という思い起こされるのは織女と牽牛、すなわち七夕の説話である。ここで七日間と出てくるのはこの七夕を暗示しているのではないだろうか。この七夕と水の神、棚機女との関連はつとに折口信夫の説くところである(註1)。

これと同じ様な機織り淵伝説も多く存在する。『熊谷家伝記』にかかわる地域のものを挙げてみよう。

#### 〔ア〕 下伊那郡天竜村満島の機織り淵

平岡満島の機織り淵には美しい女の魂が沈んでいる。それで今でもその淵の岸に立っていると、水の底からかすかに機を織る音が聞こえてくる。あるいは高く、あるいは低く、まごうかたもない機の音が波を伝わって、聞こえてくる。昔領主の遠山土佐守に仕えた一人の美しい腰元が、ある夜ひそかにこの淵に身を投げて死んだという。なぜ死んだかはもう今日では伝える人もない。村の人達は何のわけ

も知らずに、ただ機織り淵とのみ呼んで、美しい女のあわれを今に伝えている（註2）。

### 〔イ〕 北設楽郡富山村の機織り淵

大字大谷から山沢が天竜川に落ち込む口に機織り淵というところがある。淵に臨んで高く岩がそびえているが、昔この岩の上で美しい女が機を織っていたという話がある。白いすげ笠をかぶって、織った布は岩の上から下の蒼い淵へ長く垂れ下がっていた。それが幾日も続いたので、村の人々も大勢出て見物した。最後に女は機を織り終って、静かに淵の底へ入ってしまったという（註3）。

### 〔ウ〕 愛知県豊根村鹿島の機織り淵

豊根村字鹿島にも一つの機織り淵があった。昔この淵の底で、ときおり機を織る箴おとぎの音が聞こえたという（註4）。念のため長野県内の事例を二つ挙げておこう。

### 〔エ〕 機織り池（南佐久郡臼田町）

田口広川原に機織りの池と弁天の池と呼ばれる二つの池がある。昔は弁天様が機を織っていたところで、池のそばで石に耳をつけるとチャンチャンという音が聞こえてきた

といわれる。この池は金物をもって入ることを止められていたが、一人の武士が禁を破って入ったら、刀が池に落ち、橋も見えなくなるまで水が増えたという（註5）。

### 〔オ〕 機織り淵（大町市）

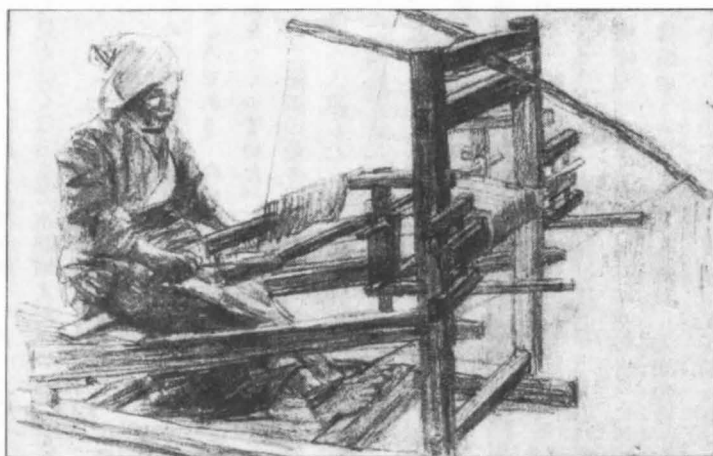
平の木崎湖から流れ出る農具川を四〇〇メートル余り下ったところである。今は浅い川底だが、明治の初めまでは深い淵をつくっていた。仁科城主の阿部貞高が木曾義重に攻められて落城の憂き目を見た時、貞高の妻は織機りを背負ってここへ入水したと伝えられる。それで天気の変わり目、ことに梅雨どきになれば、機を織る音が聞こえてくるとい、近くに生える芦は箴おとぎとあって、これを刈ると必ず雨が降る（註6）。

実はこうした機織り淵の研究も既に柳田国男によってなされている（註7）。また折口信夫もこれを問題にしている（註8）。そして柳田国男が監修した『民俗学辞典』では、機織淵（ハタオリブチ）が次のように説明されている。機織池というところもある。大歳の夜の真夜中とか、静かな雨の日には、その底から機を織る音が聞こえてくるという池や淵の伝説。ある家の美しい一人娘が行方知れずになったのが、後に水底に入って機を織っていた

るのを見てきた者があって、堅く口どめされたとか、その音を聞いた者は幸運であるというような話の筋になっているところもあり、機織りの下手な嫁が姑に責められたのを苦にして池に投じて死んだのだというように哀れな話を伝えているところもある。また姥神や水神、あるいは龍宮の乙姫が機を織っておられるのだなどといって、傍に社を祀っている例もみられる。昔話として伝えられているところもあり、木樵が斧や鉋をなくして淵の底へ探しに行くという黄金の鉋などの昔話に近い例もある。村々の祭に神の御衣を毎年新しく作って供えるならわしがあったため、人里はなれた清い泉のほとりに村の娘が機殿を建てて布を織ったのがこのような伝説を生んだものと考えられる。この点について折口信夫は、古代には一人あるいはそれを中心にした数人の処女が村を離れたところに棚を設けて隔離され、海や海に通ずる川から来り臨む若神のために機を織る習俗があったとして、棚織津女がそれぞれあると論じている（註9）。

同じく柳田国男が監修した『改訂綜合日本民俗語彙』においても、ハタオリブチを次のように説明している。

機織淵。または機織池などと称して、そうした水の



小川芋銭 「はたおり」

で機を織っている女性があるという伝説。多くは大歳の夜とか雨の日などにその音が聞えてくるといっている。全国に広く分布する話であるが、村々の祭に神の

御衣を毎年新しく作って供える習わしがあったため、人里離れた清い泉などの水辺で村の娘が機殿を建てて布を織ったのが、このような伝説を生んだと考えられる。福井県大野郡青郷村蒜畠では、機織りの下手な嫁が姑に責められ、それを苦にして実家へ帰る途中、池に投じて死んだという。それから女がこの池のあたりに通ると、機織りの音を聞くようになったという（南越民俗一）ような話も幾つかある。愛知県北設楽郡豊根村では、むかしお姫様がこの淵の傍で機を織ったといい、今も姫の腰かけたという岩が残っている。この側の橋を通る人が櫛を持っていると、その歯の一枚が欠けたという（同県伝説集）。こうした場所に祠を設けて神を祀る例もある。この機の音を聞くと死ぬとか、反対に幸福になるという話もあり、ある家の美しい一人娘が行方知れずになったのが、後に水底に入って機を織っているのを見てきた者があって、堅く口どめされたという話もある（註10）。

つまり、『熊谷家伝記』のこの部分も全国的に広く分布

する機織り伝説の一つに過ぎないのであって、これを事実とすることはできない。この地方にも広く分布した伝説を、家伝記の中に取り込んだのである。

機織り淵の伝説ができた原因の一つには、水の流れる音を機を織る音と感じたことが挙げられる。つまり水音をいかに読み取るかということである。この水音を違うように聞くと、小豆あらい・小豆とき・小豆さらさらなどとよばれる妖怪となる。それは「水のほとりて小豆をとぐような音がする」といい、こういう名の化物がいて、音をさせるともいう」（註11）ようなものである。飯田市下久堅では次のような伝説がある。

北原の今集会所のある下のあたりの道は竹藪が茂り、薄暗く気持の悪いところだった。日暮にここを通ると、小豆を転がすような音をさせるおばけがいて、「あずきあらし」が出たといって怖がった（註12）。

『熊谷家伝記』の話では、機織り淵ということではあっても淵に関係する部分は少ない。ところが、この地域に伝わる「ア」と「イ」の伝説では、機を織った女が淵に入っている。この点は前章までで見てきた異界につながる淵というイメージに結びつく。中世においては様々な音が、この世とあの世とを結びつけるものとして理解された（註13）

が、淵の中から聞こえる水音もそのようなものとして理解されたのである。当然、小豆あらいという妖怪がたてるとされた音も、あの世で作られた音がこの世に伝わってくるものと意識されたのである。ここでも音を媒介として、淵は人間の住むこの世でない、神々などが住むあの世、異界につながっているという意識が強くなったことが判明する。

註

- 1 折口信夫「七夕祭りの話」(『折口信夫全集』第一五卷一六九頁・中公文庫)
- 2 岩崎清美『伊那の伝説』一二四頁(歴史図書社・一九七九)
- 3 『早川孝太郎全集』第三卷三七二頁(未來社・一九七八)
- 4 同右
- 5 一志茂樹・向山雅重監修、浅川欣一編『信州の伝説』一四二頁(第一法規出版株式会社・一九七〇)
- 6 同右一四九頁
- 7 『定本柳田国男集』第四卷二五頁「遠野物語」、第五卷一四頁「伝説」、第八卷四四頁「海神少童」、第九卷二八九頁「箴をもてる女」、第一五卷三三三頁「家と文学」、第二六卷一八七頁「機織り御前」
- 8 『折口信夫全集』第一五卷一六九頁「七夕祭りの話」

- 9 『民俗学辞典』四七二頁(東京堂出版・一九五二)
- 10 柳田国男監修・民俗学研究所編『改訂綜合日本民俗語彙』第三卷一三二五頁(平凡社・一五七〇)
- 11 『改訂綜合日本民俗語彙』第一卷二八頁
- 12 『下久堅村誌』八二〇頁(下久堅村誌刊行会・一九七三)
- 13 拙著『中世の音・近世の音―鐘の音の結ぶ世界―』(名著出版・一九九〇)